

撫でられる石

青く明かる大空を、白雪で鋭く、あるいは緑なだらかに、区切り聳える日本の山々の出現——どうしてこんなにも山々が、この小さな国に出現したのであろう。それについて、私どもの祖々は、およそ三つばかりの説明・解釈を用意して伝えた。その一つは、どこかにボカツと凹みが出来ると、そのために他の地にドカツと凸ぼった出現があるものとした。

琵琶湖がおち込んだ途端、富士山が出来たと説き、諏訪湖の陥没と同時に、浅間山が出現したとする例などはこれで、地殻の冷却による収縮作用の結果、山脈は発生するという地質学のいかめしい理屈と、一脈通じているわけである。

他の一つは、煙噴く浅間山と雪化けする日本山などから、

粧の富士山とは姉妹で、妹富士が姉な音楽が響くので、オヤツと外に出ると、富士山がグングンとメロディーに乗って、空にのし上つていた(山梨県大月町)などと、大地が下から上へ上へとせりあがつてしまふことに、考えを据えている。火山現象を連想するが、これは山がお互にその高さを競いあう話に落着いてしまい、両岳背競伝説とか、山岳成長伝説などと名づけ、諸国に段々と保たれている。

野県南佐久郡桜井村)とか、不思議な音楽が響くので、オヤツと外に出ると、富士山がグングンとメロディーに乗つて、空にのし上つていた(山梨県大月町)などと、大地が下から上へ上へとせりあがつてしまふことに、考えを据えている。火山現象を連想するが、これは山がお互にその高さを競いあう話に落着いてしまい、両岳背競伝説とか、山岳成長伝説などと名づけ、諸国に段々と保たれている。

奥州の旅は、そのひろい裾野に、牛・馬が点々と放ち飼いにされ、真夏、可憐なアヤメが紫模様を織りなしてゐる——その速か彼方に斑雪がむら消えるが八甲田山と、安寿姫・厨子王の悲劇に、しみじみと車窓を走る岩木山とが、印象に残ろう。この山々にまつわる伝えは、

調べると、富士の方に流れたので、富士はくやしがり、その樋で八ヶ岳の頭を打ち、その横腹を蹴あげた。そのため八ヶ岳は低くなり、あんなに嶺が幾つも出来た(長野県南佐久郡北牧村)。

肥後の阿蘇山と根子岳が背競べをして、阿蘇山が負けそうになる。阿蘇はばさら竹の杖で、根子岳の頭を始終打ち叩いた。そのため根子岳の頭は、いまだにその頂きが裂けているのだ。

奥州の旅は、そのひろい裾野に、牛・馬が点々と放ち飼いにされ、真夏、可憐なアヤメが紫模様を織りなしてゐる——その速か彼方に斑雪がむら消えるが八甲田山と、安寿姫・厨子王の悲劇に、しみじみと車窓を走る岩木山とが、印象に残ろう。この山々にまつわる伝えは、

八甲田山が青森の東の東岳と争い、東岳の首を刎ねると、すつ飛んで岩木山の肩にぶつかつた。岩木山の肩のところにその瘤があり、東岳はす

八ヶ岳と富士山とが、大昔その高さを争い、山の神様が富士の嶺から、八ヶ岳の嶺へ樋をかけ水を流して

つべらな山になつた。

もつとも単純で、ほほえましくなる話は、

日向の国から、日向岳が鶴見山と丈比べをしようと、やつて来たが、日向岳は低かつたので、くやしがつて、鶴見山の横腹にくつついてしまつた。

つたのだ。

風土記や万葉集時代には、一晩の中に伸び聳えて、叔父の胆吹山の多々美彦に勝とうとした浅井岡の浅井姫を、叔父が怒つて、剣で姫の首を斬ると、それが飛んで琵琶湖の竹生島になつた、とか、大和高市郡の畝傍山（男）と十市郡の耳成山（男）が、十市郡の香久山（女）を手にいれようと争い、出雲国から阿菩大神が、仲裁に遙々來たが、ことは済んでいた（万葉集卷1）と伝えるが、「播磨風土記」では、畝傍山が麗しい女山になつてゐる。山神の問でも麗しいことは、争いのもとなのであつた。山の高さを競うことから、段々とその山容の美醜を較べることになり、自然と山の神の争いも、嫉妬を含んだり、美女を奪いあう妬争いになつてしまふ。

伊豆にまだ天城山が出来なかつた頃、駿河の富士山（長女）・下田の富士山（次女）・八丈島の富士山（末女）は、姉妹だった。次女は小さな岩山だつたが、器量がとてもよく、長女はひどいプスだつたので、妬みのはて一生涯、次女と顔を合せないとい出した。その誓いの言葉によつて、へだての屏風として、天城山が出来たのだ。

ねたみの結果、天城山が出来たことになるのだが、大和三山の争いと同じく、奥州北上川の上流地域では、美しい姫神山を、岩手山と早池峰山とが奪いあい、今でも仲が悪いと信じている。また反対に、岩手山が姫神をねたみ憎んで、送り山に云いつけて、遠くへ送り捨ててしまおうとはかつたが、送り山がその役目を果たさなかつたので、怒つてその首を剣で刎ねた。それが岩手山の右脇のあとの小山だとも伝える。

昔の人達の知識では、山自身もそこの樹木が成長するように、かく成長するものと考えていたわけである。しかし、山の場合は、異常な成長を伝える場合が多い。山がこうした成長をするほどである故、山の石も同じく、山の場合は、異常な成長をするものと想えていたわけである。やはり、一夜、逢かる天界から、人の世を慕われて天降ります神の憑代である石なのだった。ここまででは、天香具山が、大和と伊予に二分して落ち、地上の香具山・天山になつた（伊予風土記逸文）と云うのである。天降りの山なのであった。大空から山神の靈魂を、巫女が迎え祭つて、いたこの印象が、地上のある山から他

様に信じられて、その目立つ特異な姿の一説明を与えられていた。

常陸（茨城県久慈郡阪本村）の石那坂の峠の石は、毎日伸びて、天にいまにも届こうとしていたのを、峠の明神が憎まれて、鉄の沓をはいて蹴とばされた。と石の頭が二つに砕け、一つはとんでも今の河原子の村、一つは石神の村に落ちて、神にまつられている。その石那坂に残つた石の根の高さは十五米ほどだが、山全体に根をはつたもので、そのまま伸びたらそれこそと思われるものであつた。ために雷断石とも呼び、天の神の命令で、雷が降りて来て蹴とばした、とも云う。

こうした、大昔一夜の中に天を突き抜こうとして、成長し出した石が、神に蹴とばされて、小さく折れ飛んだとする話は各地に案外多い。つまりは、一夜、逢かる天界から、人の世を慕われて天降ります神の憑代である石なのだった。ここまででは、天香具山が、大和と伊予に二分して落ち、地上の香具山・天山になつた（伊予風土記逸文）と云うのである。天降りの山なのであった。大空から山神の靈魂を、巫女が迎え祭つて、いたこの印象が、地上のある山から他

の土地に、山神を迎える作法が繰り返される時代になると、地上の山のせり出しの話をひき出したことになろう。

岩木山は津軽富士とて愛されていが、昔この山が、一夜のうちに大きくなろうとしている時に、ある家の老婆さんが、夜中に外へ出て、それを見付けたので、もうそれきり伸びを見付けてしまった。

と伝え、誰も見ずについたら、どれほどまでに高くなつたろうかと、云われてもいる。日本アルプスの一前哨として峙つ信濃の有明山も同じで、ある日はからずも、それを見て、いた一人の孕み女が、立小便をしながら、「毎日毎日あんな」にもち上つて、つまりはどうする分別か」と冷笑とも云う。これらは、言うまでもなく、山の神を祭る者が女性であり、その女性が不浄・禁忌を犯した折、神の天降りや、まつりが中絶される

こと、特に神送り—大空や山の頂へ神が戻ることが出来なくなるという印象を、暗示しているのだが、とにかく、神靈・祖靈を山へ送り迎えする祭りの印象を中心にして、山がその高さを、何よりも気にしていたことはたしかであり、それが靈山の麓から出て、旅を重ねた負けずぎらいの山神信仰喧伝者の口にかかるては、さまざま取り沙汰が加わって行くことになる。そしてそれを気にする神も人も、また殖えて来たのである。

山の神に纏わる嫉妬物語も、このようないい、富士山でもやはり山の土を、遠くへ持ち去られぬように、麓に砂振いと呼ぶところがあり、古くはそくらべしたところが、馬の沓半分だけ登りの日には、必ず石を持って登るとか、愛知児犬山町に昔八百比丘尼がいて、その夢枕に、尾張富士の祭神木花咲耶媛命がたたれ、隣の本宮山より高くなりたいから、峰へ石一つでも上げてくれたなら、願いを叶えてやる、とあつた。比丘尼はこのことを、村中に触れて、山へ石を運び祈願をすると、果して一村無病息災になつた。その日が、六月朔日未明であったので、この日を石上げ祭りと定めてもいる。はては、石を持って登れば、くたびれぬ山、反対に、小石一つでも持つてくだると、必ず怪我する・神罰があると説かれ伝え

末には、こういうわけであるから、石ならどんな小石でも持つて登山して、頂上においてくるのを、山の神はとても喜ばれるとか、草鞋を山にぬいでおいてくるのも、それであると伝えている。福井県大野郡小山村では、飯降山は隣の荒島山と、背くらべしたところが、馬の沓半分だけさまで、朝はまた麓に下ると云ふ。そこで毎年五月五日の山登りの日には、必ず石を持って登ることになる。そしてそれを気にする神も人も、また殖えて来たのである。山の神に纏わる嫉妬物語も、このようないい、皆で心がけて、低きをなげきみ降ろした須走口の砂は、その夜のうちに再び山の上へ、帰つて行くと云い、皆で心がけて、低きをなげき厭うお山の意志に反せぬよう努めて来たのである。その砂と云い石とて、道辻の地蔵様や山の難所で、一掴みの砂・一個の小石を、供えて去るのと同じく、神に自分の靈魂の衆徴である石を献上して、その庇護を乞う作法の印象が、連綿と保たれているのだ。

しかし、こうした信心深い山思いの人ばかりが住むこの世では昔もなぐ、一方また、この高さを気に病む山の神様を、言葉巧みに利用しようとする者も出ていたのである。

昔、日向の人は、瘍という腫物が出来た時に、吐濃峰に向つて、「私は常にあなたを高いと思つていまし
たが、私の腫物が、今ではあなたよりも、高くなりました。もし御腹が立つならば、早くこの腫物を、引つ込ませて下さい。」とおがんで、毎朝一、一度ずつ杵の先を、その腫物にあてると、三日目には必ず治る

(塵袋・宮崎県児湯郡都農村)。

こうした考え方・信仰が、山の石の上にもうつされて、各地の疣とり石・疣石などが、その靈験あらたか
なりと断じられたのだ。長野児諏訪郡上諏訪町北沢に、高さ三十米ほど
の大きな集塊岩があり、疣石と云われている。この石から小石を借りて、疣を撫でて、疣を撫でると癒ると信じ
られているが、疣つた時には、その借りて来た石と似た石を探し添えて、二つにして必ずお返しせねばならぬ
とか、あるいは、岩の上部に穴があるが、一度、その穴の中へ石を投げこんでから、借りねば効果がないと

信じられていることも、低きをきらう山に対する考え方と、全く異なる点がないのである。この考え方が相当に強かったことは、愛知県渥美郡福江町中山の田戸神社の前に、黒石があるが、この石を借りて来て、疣を撫でるとよいと云う。しかし、疣がおちたら、同じような石を三つにしてかえさねばならぬとしているが、もしそうせぬ時には、却つて一面に疣だらけになつてしまふ、ときびしくいましめていることによつても推定出来よう。長野児北安曇郡社村の疣沢の小石を拾つて撫でると、疣が治るのだが、あちこちから拾いに来るらしいと、村人達がそしらぬふうに取り扱う態度に話さねばならぬのも、古い石惜しみの神の印象が潜んでゐるわけなのだ。疣もやはり時あつて出来る腫物(出来もの)の仲間に、入れていたのである。それだけではなく、鳥取県東伯郡三朝町で、子供の痘瘡が軽いようにと、正月中に飾る餅を、イボツキモチと呼ぶの

によれば、痘瘡までも腫物の仲間に入れていたことになる。特に、手に出来た疣は、子供ですらその見てく

れを厭いきらつて、誰の手といわず秋田県角館地方では、他人の手へ箸を渡し、交々指差しながら、「一本橋渡れ、渡れ、渡れ」と唱える。

江町中島の田戸神社の前に、黒石があるが、この石を借りて来て、疣を撫でるとよいと云う。しかし、疣がおちたら、同じような石を三つにしてかえさねばならぬとしているが、もしそうせぬ時には、却つて一面に疣だらけになつてしまふ、ときびしくいましめていることによつても推定出来よう。長野児北安曇郡社村の疣沢の小石を拾つて撫でると、疣が治るのだが、あちこちから拾いに来るらしいと、村人達がそしらぬふうに取り扱う態度に話さねばならぬのも、古い石惜しみの神の印象が潜んでゐるわけなのだ。疣もやはり時あつて出来る腫物(出来もの)の仲間に、入れていたのである。それだけ

によれば、痘瘡までも腫物の仲間に入れていたことになる。特に、手に出来た疣は、子供ですらその見てく

れを厭いきらつて、誰の手といわず秋田県角館地方では、他人の手へ箸を渡し、交々指差しながら、「一本橋渡れ、渡れ、渡れ」と唱える。

江町中島の田戸神社の前に、黒石があるが、この石を借りて来て、疣を撫でるとよいと云う。しかし、疣がおちたら、同じような石を三つにしてかえさねばならぬとしているが、もしそうせぬ時には、却つて一面に疣だらけになつてしまふ、ときびしくいましめていることによつても推定出来よう。長野児北安曇郡社村の疣沢の小石を拾つて撫でると、疣が治るのだが、あちこちから拾いに来るらしいと、村人達がそしらぬふうに取り扱う態度に話さねばならぬのも、古い石惜しみの神の印象が潜んでゐるわけなのだ。疣もやはり時あつて出来る腫物(出来もの)の仲間に、入れていたのである。それだけ

によれば、痘瘡までも腫物の仲間に入れていたことになる。特に、手に出来た疣は、子供ですらその見てく

れを厭いきらつて、誰の手といわず秋田県角館地方では、他人の手へ箸を渡し、交々指差しながら、「一本橋渡れ、渡れ、渡れ」と唱える。

江町中島の田戸神社の前に、黒石があるが、この石を借りて来て、疣を撫でるとよいと云う。しかし、疣がおちたら、同じような石を三つにしてかえさねばならぬとしているが、もしそうせぬ時には、却つて一面に疣だらけになつてしまふ、ときびしくいましめていることによつても推定出来よう。長野児北安曇郡社村の疣沢の小石を拾つて撫でると、疣が治るのだが、あちこちから拾いに来るらしいと、村人達がそしらぬふうに取り扱う態度に話さねばならぬのも、古い石惜しみの神の印象が潜んでゐるわけなのだ。疣もやはり時あつて出来る腫物(出来もの)の仲間に、入れていたのである。それだけによれば、痘瘡までも腫物の仲間に入れていたことになる。特に、手に出来た疣は、子供ですらその見てく

れを厭いきらつて、誰の手といわず秋田県角館地方では、他人の手へ箸を渡し、交々指差しながら、「一本橋渡れ、渡れ、渡れ」と唱える。

の田代浜地方では、「みつえぼ、とえば、十になつたら移れ」と、簡単にしている。青森県五戸地方、「いぼきり、ときり（カマキリ）、十になつて、うづけ、うづけ（移れ）」——これら移れうつれは、他の者に移そうとする呪言になつてているのだ。かかる呪法とて、何も子供だけがしている発明でないことは、各地の疣石によつても証明はつくが、長野県諏訪郡川岸村には、疣形の突起のある石があり、子供達は疣が出来ると、自分の疣と石の疣とに棒を渡して、やはり「疣々、一本橋渡れ」と唱える。ここでは石の靈的な存在が、同形のものに対する「同情悲願」の姿になつてあらわされているわけで、こうなると疣々があらわれている石ほど、効果があることになる。疣だらけに石も、なやみ苦しんでいることになるわけだが、疣とりには、如何にも古い靈魂の問題が纏つ正在のだ。兵庫県宍粟郡奥谷村大字原のお盆行事には、ミソハギで精靈箸をつくるが、精靈送り

の日には、精靈に病気を持つて行つてもらうと云い、この箸で患部をつまんで頬む。疣を精靈箸でつまんでは、「イボ ハシワタレ。ハシガナケリヤ、ポツトトベ」と放る真似をする。また、盆の十六日の送りのお供花一女郎花・ミソハギなど季節の花で、疣を撫でると、仏様がそれを持つて行つてくれるとして信じていて。奈良県吉野郡では、新仏に供えた麻の箸で、疣を摘んで、その箸を川に流している。すべて子孫を愛するこまやかな心くばりから、醜いものを精靈様が、持ち去つて下さると考え、箸・花などはその流の靈の移動をつかさどるものと信じ、疣とり石とて、この箸・花と同じ働きを持つものと信じられていたことになる。つまりは、疣の靈の移動をつかさどるものと云ふが、浜松・紀州小鶴谷の神が持ち運び去つてくれることになるのだ。ひいては、各地の神社に見られる疣石—その満みに溜る水をつけると、疣が治るというように

もあり、さらに崩れて、千葉県長生郡土睦村川島の疣八幡社の土をとつて、疣につけると治るとか云うよう前に、変つて来る。金沢兼六園の疣とり石は、金沢神社の細い参道の鳥居前右側に、てらてらと薄暗の艶を持っていた。古くはザラザラであつたと思われる姿であり、そのすぐ右手良県吉野郡では、新仏に供えた麻の箸で、疣を摘んで、その箸を川に流す水がある。金沢という地名の起源となつた泉で、金掘り・鍛冶の連衆の古き居住地を示すものになつていて。芋掘り藤五郎は、ここで芋を掘り、細々と暮していたが、大和初瀬の長者の娘が、押しかけ女房に来て、芋を掘りとる土地はすべて黄金であることがわかり、それを洗つたところが、「金城靈沢」であり、忽ち長者となり覇をなした。

この長者譚は、浜松・紀州小鶴谷にも伝わり、広く炭焼長者譚の崩れた姿で、諸国をめぐりあるいている。その古名は、イボムシリ・イボンジリ（倭名抄）・ボンジリ（隠岐）などと云い、この虫をもつて、疣治療をする法を、この連衆が心得ており、それを知つた人々は、蠣螂が小さく

振る鎌の印象とともに保っていたのであった。はてには、その鎌を振るさまを、この虫の怒る状態にみたてて、「腹立ちばばさ」などと呼ぶ異名までをとり、終には、新潟・長野の地方で、怒りやすい者・すね者をもイボツリムシと云い、イボツルを腹立つという語に感じている。これには子供や若い娘などがすねて、機嫌のわるいことを、山陰地方で隱語風に、ブリブリする意で、「鮒釣る」とあらわし、ブリツルと云つてゐることにも、脈絡があつたわけである。人が怒つてどなることも、馬が発情することもイボルといふと同時に、泉などの水が涌き出たり、または、水が流れて地面の穴などが段々と大きくなること、あるいは薔がふくらんだり、吹出物がはれたりすることも、イボル・エボルであらわすが、イボ・エボというと、ほら貝（伊予大三島）でもあり、木の枝先や実をむすんだばかりの果物を、指していくのをみると、どうもイボ・エボな

る語の源は、鍊金術に關係があるものと考えられる。

イモジ（鑄物師・鑄掛屋）は、才に欠かせぬ木炭を、大分県宇佐郡から南の山村にかけて、イモジと呼んでいるのも、この連衆の作業術の發達と、この地域を一根拠地にして、地方へ散り歩いたことを明らかにしている。

鋳掛け・金屋の連衆は、鉄を処理するための火處を、何よりも大事にし、その信仰の中心としていた。そして、火處の神聖な忌石が、いも石・いぼ石とも呼ばれ、その神秘さは、作業の上の水とともに保たれて、様々な伝説をひろげたのだ。疣とり石に、疣とり水の効用が纏わつていても、所縁古い民俗でありた筈である。「炭俵」に、

ほかほかと二日灸の、いぼひ出で野坂

孤屋

三月もほかほかと終る頃、足などを据えた二月二日の灸（八月一日に

も据える、癌の上に用いれば消えるほどに効果があると、無病息災のためにする）が、腫れもちあがつたこ

かまきり、かまきり、おれン家へ来るとき、鉈鎌で斬ってしまうぞ。などと千葉県（上総）の子供らに、強迫されたりして、古き民俗印象を保つている。

奈良春日の里も、古くから鍛冶の連衆の一根本拠地なのであつた。苔に湿める燈籠が、孤独にと思うと群集して、柳・馬酔木の下闇に、影を曳く春日参道は、奈良街辻の狭さから人々を寂かに解放してくれる。そして朱の和やかな楼門の前にかかると、参詣の誰も彼もが、一時かたまり群れて、ぼそぼそしては、列をくずして社前に流れこむ。腰高の柵が、玉砂利を四角く区切り、その中に三十二種ほどの山形石が、玉砂利から生えている。一人一人、柵越しにその手を差しのべて、その石を撫でて行くのだ。靈験あらたかな春日大明神に詣でようと、遙々旅を来て、そのお社を目の前にして、かかる石にその願いをこめている。何か不都合な

感じはのゝるけれど、我も人も、その不都合を合理的に非難し、排斥出来るだけの妥当性を感じない。むしろ、神の肌に触れたという興奮にも似た心おどりを保つことが出来て、こだわりなく春日様にも、我まま一杯な祈願をかけている。こうした「お撫で石」は、疣だけではなく、人目をはばかる、あるいはひそかに気をもまねばならぬ病気までも、石を撫でることによって治せると信じているのだ。眼の悪い者は、石を撫でては眼の縁をなでまわし（長野県更級郡八幡の丸石・眼石）、子を願う者は、石を撫でそのまま、妊娠を念じてその腹を撫でているように、世の進むにつれて、石が負わせられる役目は、あまりにも過重になつて来た。

その物の含む威力を発動させるには、その物を叩いたり、突いたり、あるいは揺らしたりするが、撫でても同じ効果を期待出来た。撫で擦る動作が、古い時代の呪術的な感触による快さを、無意識ながら蘇らせる

魅力によつて、靈石を撫でることも繰り返されているのだろうか。古く「古事記」下巻に、「海石にふれたつなづの木の さやさや」と、海底の岩に生えている藻（なづの木）を、人間によぎ靈魂一威力をくつつける呪いの道具に扱つてゐる歌がある。神聖なこの術で、躰を撫でると、新威力がその者の躰に籠りこむと信じ、その籠りこむ中心部を、脳（なづき）と云う。人間が生れながらの身には、持ちあわせていない威力・靈魂—外来魂を、とり入れる一方法が、なづ—なで—こする呪術であつた。極論すると、このような外来魂・外来靈の一種を、古くは「な」という語であらわし、その「な」の理想的なものを、沢山持つていて、人人に分け与える神の代表が、大汝命（天名持神・大国主命）・少彦名命であり、この「な」の厭わしいものを持つてゐる者が、鬼の形で信じられている儺の神や、鳥の姿に考へてゐる名鳴女なのであつた。ひいては、かかる

外来魂を、人間の躰にいれこめるのに役立つものの総称を、菜・魚と呼んだ。そして、この「な」—外来魂は、年月が経つのにつれて、その増大・成長をとげ果すものと、期待された。その外来靈力の成長段階を示すものが、またそのものの名でもあつた。ために、幼名・本名・醜名（あだ名のこと・四股名はあて字）など、次々と幼年戒・少年戒・成年戒などとしたのである。老若を問わず、愛情のあらわれとする「可愛いいいなア」と、相手を撫でるしぐさも、その相手を、自分の思い通りにしたい—理想的な状態におきたいという心の働きが、意識的にあるいは無意識ながら、相手の外来靈—理性—を、撫でることによって奪つてしまい、こちらが自由にすることの出来る相手にしてしまう態度にほかならない。しかしこう感じては、味気なさが残るだけ。

は石に籠つてゐる威力・威靈を、こちらに移しとつて、役立てようとする作法になる。その目的が叶つた時には、宝石にこもつてゐた強大な威靈が、こちらにこもり付いて、その身の気にかかるすべての煩いが、やわらぎ消え、また一方では、その石を自由に扱えるほどに、信仰上は軽く感じることが出来たわけである。この感激が、村・町の生活の上に、具体的な姿を持つて、オモカルサン（重輕石）や力石に纏わる呪術と、その言い伝えを各地にのこすことになつたのだ。疣石の威力は、現在でも依然として、人々の悩みの救いとなつており、昔から落語「紺田屋」の枕に用いられ、人々を笑わせているのも、まだ古い疣石感覺を失つていないためなのである。今風のお粗末になおせば、「ネエ、イボは万年筆で撫でると、治るヨ。」「なぜサ。」「エボナイトで出来てゐるからサ。」